

演目 『葛城クセ』

行番	役	詞章	現代語訳	トークのヒント
1	シテ	かづらきや	『葛城や	((②【クセ】))
2	地	木の間に光る稲妻ハ	木の間に光る稲妻は	
3		山伏の打つ	山伏の打つ	
4		火かとこそ見れ	火かとこそ見れ』という和歌があるが	
5		げにや世の中ハ	本当に、人生というのは	
6		電光朝露石乃火の	稲妻の光や、朝の露、火打石の	電光朝露石の火：人生がはかない事の喩。
7		光の間ぞと思へただ	光の様にはかないものである。	
8		我が身の歎きも取り添えて	自分の歎きを投げ木と	我が身の歎き：歎きと投げ木、言葉を重ねた。
9		思ひ真柴を焚かうよ	思って柴と共に焚いてしまおう。	
10	シテ	捨人の	世捨て人の御事とて、	
11		苔乃衣の色深く		
12	地	法に心ハ墨染の	仏道に心を澄まし、	心の澄む、墨染
13		袖もさながら白妙の雪にや色をそみかくだ乃	山伏のお召しになっている墨染色の衣も、雪のためか白く染まったようで、	そみかくだ：山伏の異名。色を染む。
14		篠懸もさえまさる標を集め柴を焚き	寒さも一入お感じの事と思います。しもとを集め柴を焚いて	冴えまさる霜、しもと
15		寒風を防ぐ葛城の	寒い風を防ぎましょう。	
16		山伏の名にしおふ	山伏の名の通りこの山に臥し、	
17		片敷く袖の枕して	お召しになった着物の袖を枕にして、	
18		身を休め給へや御身を休め給へや	お休みください。	

【葛城の物語】

ある山伏（ワキ）が葛城明神に参詣するため

葛城山に辿り着きました。季節は冬、

雪が止む気配がなく、困っていると

女性（シテ）が現れ、宿を貸してくれます。

女性は焚火で暖を取らせてくれて

手厚いもてなしを受けた山伏は感謝し

夜の勤行（一定の時を定めて行う読経）を行うと

その女性が、実は自分は葛城明神で

自分の為に加持祈禱をして欲しいと頼んで

姿を消します。

山伏が葛城明神のために加持祈禱をしていると

本来の姿の葛城明神（後シテ）が現れ

舞を舞って喜びを表し、夜が明ける前に

葛城の岩戸の内に姿を消します。

② 【クセ】

『葛城や 木の間に光る 稲妻は

山伏の打つ 火かとこそ見れ』

(葛城山の木の間に光る稲妻は

山伏が火打石を打つ火の光のように見える)

人生のはかなさを表す「電光朝露石の火」

の意味合いを持った和歌から始まります。

人生のはかなさを歎いている女性ですが

大雪に困っていた山伏を助け、もてなします。

このクセの部分は女性の心優しく

暖かな気遣いの場面です。

③ 【冬の能】

能『葛城』は雪深い葛城山でのお話です。

その雪深いなかでの「クセ」のもてなしの場面。

寒い中、人間の暖かさを感じられます。

能では雪の積もった笠を被り、

雪の積もった柴を負い、杖をつきながら

シテは登場します。雪深いなか歩いている

描写がされます。